

幕末の佐賀鍋島藩

1. 出自

龍造寺の出自については、諸説あるものの藤原姓高木氏すなわち大宰大貳を勤めた“高木季貞”の子孫が肥前国小津郡東郷龍造寺の地頭職に補任され、龍造寺の地名を名乗るようになった。初め筑後守護の少貳氏に属し其の主力として大友氏と戦うも、肥前に追われて大内氏に走り、大内氏の後援により佐嘉城を奪還した。

少貳家の衰えに比べ日増しに勢を増してきた龍造寺一門の台頭を怖れた少貳一族の馬場頼周が、龍造寺家兼の子の家純・家門と孫の周家・澄家・頼純・家泰を誘い出して謀殺した。このため龍造寺家兼は一度に六人の家族を失う。

其の後、龍造寺本家当主の胤栄が没したので、周家の子胤信が本家の娘以登の婿養子に入って、龍造寺隆信と称して龍造寺本家を継ぐ。

1569年大友氏が大軍にて佐嘉城を攻めた時、家臣鍋島信昌の夜襲により大友軍を打ち破って大友軍の将大友親貞を討ち取り、龍造寺隆信は名声をあげた。肥前一国を従えた龍造寺隆信は、耳川の戦いで島津軍に大敗した大友氏の勢力が空白となった筑後・肥後・豊前を攻め、一時は大友氏と島津氏と九州を三分する勢いを示した。しかし、島原の沖田畷(おきたなわて)の戦いで有馬氏・島津氏の連合軍に敗れ、龍造寺隆信は敗死した。其の後、豊臣秀吉の九州征伐による再配置を経て江戸時代となり、龍造寺本家の血統が途切れたことから龍造寺一門の合意のもと藩主を鍋島氏に禅譲した。

2. 特徴

鍋島藩35万石は特異な藩で、鍋島家と龍造寺系領主とを包括した複合藩であった。関ヶ原の戦いでは、鍋島藩は、西軍として参戦したが、西軍敗戦となった後、同じ西軍だった立花宗茂の柳川藩を攻撃し、罪一等を許され存続したが、極めて微妙な外様大名であった。

(1) 朱印状

九州征伐後の豊臣秀吉による龍造寺高房への朱印状によれば、龍造寺系列の四家に個別の朱印状を出している。通常であれば、藩主に朱印状が出され、家臣は藩主から禄を与えられる形となるが、鍋島藩の龍造寺系列の四家には個別の朱印状が与えられており、これが徳川幕府体制でも踏襲された。

[註]「豊臣秀吉の朱印状」

龍造寺高房知行割の事 ; 名目上は藩主でありながら高房には知行がない。
(古文書イハク物成高1万石でも知行高10万石相当なり)

龍造寺系列の武雄領主 ; 1.4万石 [物成高]

龍造寺系列の多久領主 ; 1.0万石 [物成高]

龍造寺系列の須古領主 ; 0.5万石 [物成高]

龍造寺系列の諫早領主	； 1.9 万石 [物成高]
鍋島直茂	； 4.4 万石 (知行高)
鍋島勝茂	； 0.9 万石 (知行高)
鍋島直茂の弟	； 0.6 万石 (知行高)

(2) 物成高

禄高は知行高で示されるのが一般的であるが、**龍造寺**系列の四家には、**豊臣秀吉**の朱印状以来、物成高で示されている。[註；物成高とは税として集まった米の実収入高であり、五公五民とすると知行高（総収穫米量）に換算すると倍となる。]

更に、大村藩主がキリスト教に帰依すると、彼杵、川棚及び伊万里地区が挙げて武雄領に帰属したり、遠浅の有明海の干拓等で水田面積が逐次拡大（江戸時代で約600町）する等があり、鍋島藩は知行高35万石とされているものの、正確な知行高は現在に至るも不明とされている。

享保のウンカ大飢饉では、収穫量2割となる大被害を受けた。その被害調査では72万9000石という被害集計がでていたが、幕府への報告は34万石に修正され本来の知行高は秘された。この事実から推計すると、鍋島藩は約90万石程度の知行高相当の実力をもっていたことになる。

(3) 特命普請工事

龍造寺系列の四家は、大名並の知行を有しながら、参勤交代や幕府から命じられる普請工事等の出費がなかったことから財政的にゆとりがあった。

(4) 支藩参勤交代

鍋島本家は、島原の乱での先駆けの軍律違反の疑いを晴らすため、三人の子供を幕府奉公に差し出すが、大名扱いの部屋住として遇された結果、小城藩・蓮池藩・鹿島藩の三支藩も参勤交代が義務付けられた。当時の参勤交代には、多大な経費が必要であり、**龍造寺**系列の四家が差し出した領地でもって三支藩の領地としたが、鍋島藩は本藩の他に三支藩も参勤交代をしており、慢性的な財政難に陥っていた。

江戸中期の参勤交代では、「夜遅く宿場に到着し、翌早朝には旅立つことから佐賀鍋島藩と薩摩島津藩は儲からない」という宿場町の言伝えまでもが残っている。

(5) 長崎警護

佐賀鍋島藩は福岡黒田藩との交代で長崎警護を申し付けられており、隔年に1000名の武士を警備のために長崎に派遣しなければならなかった。

鍋島藩にとって、長崎警護は負担の重い役目ではあったが、役目を通じ長崎警備の名目で、海外取引・貿易（密貿易）・幕府並輸入関税（無税）等十分すぎるくらいの旨味もあった。他藩と競合する輸入品や輸入禁止の書物類についても、ほぼ独占的に手に入れることができた。

(6) 領国統治

鍋島藩では、対外的な外交は藩主／御側役が担当し、領国における統治は、請役（他藩は国家老）が交代で担当していたが、財政難の鍋島藩では、請役を勤めるためには、不足分の穴埋めのため自領からの持ち出しが多く、財政的に余裕のない**鍋島**系の支藩では務まらず、**龍造寺**系の四家が交代で請役を務め、領地経営にあっていた。鍋島藩の財政破綻を防ぐために、上米等（藩士の禄の減額）の政策が検討された折、藩士

の負担があまりにも重くなることを考慮し、**龍造寺**系の親類同格四家は自主的に二度にわたり本藩に領地を差し出した。このため、領地は半減したが、鍋島藩内における親類同格四家の請役としての地位は高かった。

領地が半減した諫早領は1万石（物成高）となったが、それでも知行高10万石相当とする古文書が残っている。諫早領では「百姓御振る舞い」という正月の行事があり、領主がすべての百姓を接待する慣わしがあった。ある年の「百姓御振る舞い」人数が6900名に登った記録が残されている。

江戸中期の藩主**宗茂**の時代となると、藩成立時の親類同格四家の貢献も忘れられ、藩主の権限を拡大するため請役を罷免して藩主の御側役等による領国統治に切り替えた。すると1732年にウヅカ大飢饉が発生した。この時、御側役による領国経営は機能せず、鍋島本藩では人口の20%の8万人が餓死する惨禍となった。一方、親戚同格四家の**龍造寺**系の領地においては、懸命な対応により、餓死者の発生は免れたようである。このような事態を憂い、重臣一同は総意により、藩主に無断で御側役を罷免し従来の請役制度を復活させている。事後報告を受けた藩主は、激怒したものの御側役の罷免を受け入れざるを得なかったようである。

藩主**鍋島齊直**（幕末の一代前の藩主）の時代には江戸での藩主の放蕩により、藩の借金は50万両を超え、財政破綻の危機に瀕した。その上1808年には英国軍艦フェートン号が長崎に侵入する事件が発生した。其の時、鍋島藩の長崎警護の手抜きが発覚し、鍋島藩は藩取り潰しの危機に瀕する。このような危機に直面し、請役となった武雄領主の**鍋島茂義**は国元重臣に諮り、急遽、重臣一同と江戸に上り**鍋島齊直**に隠居を求め国許に返している。そして、その嫡子の**直正**を藩主に立て、藩改革に着手している。鍋島藩における藩主と請役の力関係を伺わせており、藩主と重臣との関係はこのように会社の社長と取締役のような側面もあった。

(7) 藩校

佐賀の『葉隠』は江戸中期に書かれたとされており、御書物役を隠居した**山本神右衛門**が当時の文治主義政策と江戸・上方の華美に反発し、鍋島藩創生期（戦国時代）に戻って武士団の精神的支柱を唱えたものである。

しかしながら、鍋島藩内では、『葉隠』にかぶれた藩士が努力をせずに怠惰に流されており、藩政改革を推し進めるには障害となっていた。よって、鍋島藩では、『葉隠』をもてはやしたことは一度もなく、これを禁書扱いとし、駆逐に腐心した。このため、藩校「弘道館」（**古賀穀堂**（朱子学）1770年）を設立し藩政改革は人材育成から進めている。藩校での教育の狙いは次のとおりであった。

- 再教育によって、葉隠かぶれの若い武士を一掃する。
- 藩政改革の為に、下級藩士も含めた人材を育成する。
- 人件費削減の為に、画一的ではなく個人管理された教育目標によって成績不良者の家は減俸となった。
- 下級藩士であっても、優秀な人材は若手官僚として登用し、農村改革に投入した。

[註] 『葉隠』

鍋島藩三代藩主鍋島綱茂の祐筆田代又左衛門が御書物役山本神右衛門の談話を書き残したもので、其の内容は次のようなものであった。

- ・ 国学（鍋島家の歴史）のみが重要で、他の学問は無用なり。
- ・ 鍋島藩には代々藩主に悪人も鈍智の殿もない不思議な家柄なり。
- ・ 釈迦も孔子も何の価値もなく、鍋島家に忠誠を尽くすことが大切である。
- ・ 鍋島家のために死ぬことが最高の倫理なり。
- ・ 文治主義を痛烈に批判し、本書を秘本とする。
- ・ 『葉隠』は鍋島藩領内のみの禁書とされていた。（昭和に入って一般に知れることとなった。）

（8）藩政改革

下級武士であっても、弘道館を修業した優秀な人材は、郡奉行に抜擢され農村在住制となって現地で復興に取り組み、「加地子猶予令」「借財整理令」等の実態に噛み合った政策を立案し農村改革の成果を挙げるに至っている。藩借金については、二割を50年割賦とし、残り八割は踏み倒したようである。藩政改革は、“教育による人材育成”、“身分を越えての下級武士の抜擢”及び“農村改革による税収の安定”と順調に滑り出した。これらの藩政改革は、各領地では痛みを伴うものでもあったが、全て請役の親類同格四家が率先して進めた結果、鍋島支藩各家は協力せざるを得なかった。鍋島藩では、長州藩や土佐藩のように保守・革新の対立による藩内騒動等は起こらずに明治維新となっているが、これは、下級武士の人材登用や請役の合理的な政策とリーダーシップによるものが大きいと伺われる。1838年には幕府が褒賞しており、長州毛利藩及び薩摩島津藩が経済的な側面の強い藩政改革であったのに反し、佐賀鍋島藩藩政改革が農村制度及び人材登用を含めた幕府が認める総合的な改革であったことを裏付けている。

また、藩政改革には懸硯方（かけすずりかた）も設けられ、雑穀・麦・樫・陶器・茶・石炭・漁業等の収入は軍用金として蓄積されていった。

武雄領主**鍋島茂義**は、請役を辞任後は、専ら外国の図書や武器並びにその技術を積極的に導入し、その成果を鍋島本藩に浸透させていった。導入した科学技術は、種痘・ガラス・火術・火薬・写真・蒸気船等、いずれも最先端のものであった。

3. 幕 末

（1）外交

藩主**鍋島直正**の幕末の外交は、迷走の連続であり、幕末には幕府・朝廷・各藩からも相手にされない八方ふさがりの状況となり、最終的に請役が外交にも参加するようになったようである。

鍋島直正の正室は、**徳川家斉**の十八女**盛姫**[1811-1847]であり、**直正**より四歳年長であったが、聡明で將軍最愛の姫であった。佐賀城火災における幕府からの2万両の貸与や**直正**21歳での破格の官職“少将”昇任などは、江戸城大奥に働きかけての**盛姫**の政治力と思われる。**直正**の迷走外交もこれらの**徳川**幕府との良好な関係を考慮すると、討幕の旗印を挙げることもためらわれ、意図的に中立外交に徹したとも考えられる。**直正**については名君評価が分かれている。藩政改革は、武雄領主**鍋島茂義**・**茂昌**親子が主体となって成功したものであり、**直正**による改革の歴史が見当たらない。**司馬遼太郎**は**直正**を「肥前の妖怪」と評価しているが、明治維新での版籍奉還への最

初の賛意表明や北海道開拓等は、武雄領主**鍋島茂義・茂昌**の功績では説明できない藩主**鍋島直正**の見識とも受け止められる。

(2) 武装近代化

幕末の請役は武雄領主**鍋島茂義**の嫡子の**茂昌**（藩主**鍋島直正**の義兄）であり、この請役が鍋島藩の実力者であった。請役が中核となって進めてきた領地経営は安定しており、薩摩藩・長州藩のような藩内での尊王攘夷・佐幕開国の葛藤もなかった。外交失敗の危機感は、長崎警護の名のもとに、最先端の兵器の導入による軍事力の強化を促した。大砲製造の為の反射炉等の世界最先端の製造設備等の技術も手に入れていたことから、小銃等の性能を見分けることも出来た。このように外国の動向や技術に触れていた鍋島藩では、攘夷の実行不可能なことも十分に知っていただろうし、外様藩として積極的に幕府を支える立場でもなかった。また、政治の中枢に踊り出ることも執着しなかった。藩内政についても、下級武士の抜擢や農村改革の成功等もあり大きな不満の蓄積もなかったのではないと思われる。鍋島藩は、維新功労藩の薩摩藩・長州藩・土佐藩の一角に加えられるものの、幕政中枢や朝廷内での地位にも執着しておらず、その強大な軍事力に比べ、政治的野心も膨らまなかった。鍋島藩は、恐らく藩内統治上は徳川幕府政権下でも不都合はなかったものと思われる。しかしながら、列強による植民地化が進む中での国防の危機観は有していたはずであり、その結果、武装近代化に邁進したものと思われる。

<参考>

隣の清国では1840年にアヘン戦争が勃発する。当時の広州では、英国商人が持ち込むアヘンによる社会問題（銀の流出・財政悪化・中毒患者増大）が深刻化していた。このため、清朝の道光帝は信頼できる意見書を提出した湖広総督の**林則徐**を欽差大臣（大臣の命令は皇帝の命令と同じとする重職）に任命し広州に派遣する。**林則徐**は外国人居住区を軍隊で封鎖し英国商人から1425トンのアヘンを没収し、再生不可能な処分（海岸にプールを作ってアヘンの麻薬成分を弱める石灰と塩を混ぜて海に廃棄した。）をするとともに沿岸防備のための軍備を整備する。この処置に抗議し軍隊を派遣した英国は防備の固い広州を避け、北京に近い天津に向かった。清朝宮廷は動揺し、**林則徐**を解任し英国に譲歩し南京条約を結ぶ。職を解かれて左遷となった**林則徐**はそれまで集めた海外情報を友人の**魏源**に託した。**魏源**はこれをまとめ『海国図志』を発刊する。この『海国図志』が鍋島小城藩文庫目録（1856年）として記録されている。すなわち、鍋島藩は中国のアヘン戦争の実情と列強への脅威を少なくとも明治維新の10年前に知っていたことになる。鍋島藩が他藩に先駆けて武装近代化に邁進した理由が十分に理解できる。

(3) 鳥羽伏見の戦い

このような状況下で、薩摩藩・長州藩を主体とする鳥羽伏見の戦いが始まるが、鳥羽伏見の戦いの緒戦では、鍋島藩は長崎警護に専念し参戦を躊躇した。

(4) 戊辰戦争

ア. 参戦

引続き戊辰戦争に移行すると、幕府側精鋭の庄内藩・長岡藩に押され戦局は一進一退を繰り返す。この時、朝廷はその強大な軍事力を有する鍋島藩を幕府側とするこ

とを恐れたものと思われる。藩主に詔勅を送り、参戦を促しているが、鍋島藩は即応しなかった。このため朝廷は、藩主**鍋島直正**の助言もあったものと歴史に記されているが、鍋島藩の武雄領主**鍋島茂昌**に宸翰(しんかん) [天子の直筆の文書] を与える。宸翰を受け、武雄領主**鍋島茂昌**は参戦を決意するとともに鍋島各藩も同調していったようである。

[註] 各藩の銃保有状況と価格

一. 前装滑腔銃

①ゲーベル銃 ; 火打石・雷管式 1 ~ 2 両

二. 前装施条銃

②ヤーゲル銃 ; 9 両

③ミニエー銃 ; 椎実型弾

④エンフィールド銃 ; 椎実型弾 1 7 両

薩摩藩・長州藩の標準装備

三. 後装施条銃

⑤スナイドル銃 ; 椎実型弾・真鍮薬莢・雷管一体型 単発 2 6 両
庄内藩標準装備、薩摩藩購入

⑥シャープネス・カービン銃
; レバーアクション式 単発 3 3 両
庄内藩 6 0 0 挺購入

⑦ヘンリー・マルチャーニ銃
; ボルトアクション式 単発 1 1 両
庄内藩購入

⑧スペンサー銃 ; レバーアクション式 7 発装填 連発 3 7 両
鍋島標準装備

イ. 武雄隊の標準装備

戊辰戦争までに長崎に入荷したスペンサー銃 [Spenser Rifle ; 1 8 6 0 年に米国で発明された口径 1 2 . 5mm・椎実型弾丸・金属薬莢・射程 8 2 0 m・全長 1 . 2m・重量 4 . 6Kg の後装七連発レバーアクション施条銃] は鍋島藩が他藩に先んじて全て買い取ったようである。

この時の武雄隊の標準装備は、次のとおりであり、当時の世界最先端の装備であった。

装備 : レミントン拳銃 (隊長)、スペンサー銃 5 5 0 挺、黒の木綿軍服、ゴム雨合羽、毛布

砲隊 : 6 ポンドアームストロング砲 6 門
4 . 5 ポンド臼砲 6 門

歩兵 : 1 , 0 0 0 名 (砲隊を除く歩兵は全員スペンサー銃を装備)

ウ. 薩摩藩・長州藩の標準装備

この時に薩摩藩・長州藩が標準装備していた銃はエンフィールド銃 [Enfield Rifle ; 1 8 5 3 年に英国軍が採用した口径 1 4 . 7 mm・卵型弾丸・紙製火薬筒・雷管使用・射程 1 1 0 0 m・全長 1 . 25m・重量 3 . 8Kg の前装施条銃] であった。

エ. 庄内藩の標準装備

庄内藩は、豪商の**本間氏**の資金援助により、スナイドル銃 [Snider Rifle ; 1864年に米国人**ヤコブ・スナイダー**がエンフィールド銃を改造した口径14.7mm・椎実弾丸真鍮薬莖雷管一体型・射程1200m・全長1.25m・重量3.8Kgの後装施条銃] を保有していた。

このため、佐賀鍋島藩が参戦するまでは、庄内藩が前装施条エンフィールド銃を標準装備とする官軍を圧倒しているが、正に保有した小銃の性能が戦況を支配したようである。

<参考>

維新10年後に起こった西南戦争の時ですえ、官軍の装備武器の大半は前装施条エンフィールド銃(24480挺)であった。西南戦争中のエンフィールド銃の発射弾数が1挺当たり143発の記録が残されている。これに対し、一部装備の後装施条スナイドル銃(8430挺)の1挺当たりの発射弾数が3101発であり、約20倍の発射弾数となっている。鍋島藩のスペンサー銃は、連発式であることからスナイドル銃よりも更に、多くの弾を発射できたことは想像に難くない。

このように維新10年後の西南戦争での官軍の標準装備品よりも進んだ連発式のスペンサー銃を鍋島藩が標準装備して戊辰戦争に臨んだ。鍋島藩は、旧式となった武器は他藩に売りつけ、高性能の武器に逐次換装していったようであるが、それでも2~3倍もする高価なスペンサー銃を標準装備として揃えていたことは、当時の日本国内のレベルから抜きん出ており、世界標準(アメリカ南北戦争)の武装を保有していたこととなる。また、武雄領の場合は武器の購入のみではなく、近代戦の作戦・運用までも十分に履修していた。歴史において仮定は許されないが、当時の鍋島藩は長州藩・薩摩藩の連合軍をも打ち破ることができる軍事力を有していたこととなり、これが幕府側となると戦況は逆転していたことは明らかであるが、中立としても討幕側の戦勝となったかどうか疑わしい。

オ. 終戦

他の鍋島各隊の装備も武雄隊とほぼ同じ装備であり、鍋島藩が参戦することによって、一進一退を繰り返す奥羽戦線は東北の冬を越えずに短期間で終結した。

カ. 戦果

戊辰戦争での鍋島藩の主な活躍は次のとおりである。

- 上野の彰義隊を鍋島藩のアームストロング砲で壊滅させた。
- 籠城する会津若松城にアームストロング砲を打ち込み、開城させた。
- 鍋島藩の一部の部隊で奥羽列藩同盟の盛岡藩を屈服させた。
- 奥羽列藩同盟最強の庄内藩の猛攻から秋田佐竹藩を救い、引き続き鍋島藩主導による作戦によって庄内藩を撃破し最終的に屈服させた。

キ. 戦死者

戊辰戦争を通じた各藩の戦死者の状況は次のとおりである。

- 佐賀藩の参戦者5000名のうち戦死者 75名(戦死率1.5%)
うち武雄隊の参戦者1000名のうち戦死者 6名(戦死率0.6%)
- 薩摩藩の参戦者7300名のうち戦死者514名(戦死率7.0%)

- 長州藩の参戦者5000名のうち戦死者300名（戦死率6.0%）
- 秋田藩の参戦者8700名のうち戦死者329名（戦死率3.8%）
- 庄内藩の参戦者4560名のうち戦死者298名（戦死率6.5%）幕府側武雄隊の戦死者の比率が極端に低いのは、激戦地を避けた訳でなく、装備兵器の性能、高い練度及び高い近代軍事用兵の差と思われる。

＜参考＞西南戦争の戦死者

官軍の投入兵力58,000名のうち戦死者6,843名（戦死率11.7%）

西郷軍の兵力約30,000名のうち戦死者約5,000名（戦死率16.7%）

＜参考＞西南戦争に於ける官軍装備の銃と使用弾数

エンフィールド銃 24480挺 351万3780発（143発／挺）

スナイドル銃 8430挺 2614万5068発（3101発／挺）

(4) 明治維新

戊辰戦争が終了して鍋島藩各隊は佐賀に凱旋した。現代になっても、会津では戊辰戦争における長州・薩摩への蟠(わだか)りが残っているが、佐賀に対する恨み等は聞かない。これは、鍋島藩が政治面には関与せず作戦のみに専念した事及び軍秩序が保たれていた事に拠るものと想像される。

戊辰戦争後、明治新政府は二度にわたり鍋島藩武雄領主**鍋島茂昌**に兵部省の顯職“兵部大輔(少将)”への就任を促しているが、**茂昌**は最後まで辞退し武雄にて余生を送った。其の理由は大將に**西郷隆盛**が就任しており、その下に就くことを潔よしとしなかったようである。戊辰戦争において近代軍事用兵の才覚に欠ける**西郷隆盛**を見抜いていたようである。

一般的には、**西郷隆盛**は豪放な性格と思われがちであるが、功績のあったのは謀略のみであり、近代戦ではほとんど成果等を上げていない。上野では、彰義隊攻撃を優先すべきとの**大村益次郎**の作戦判断に押し切られており、**西郷隆盛**は近代戦争に疎かったようである。また、官軍の実質的な最高指揮官であったにもかかわらず、戊辰戦争終結の前に戦線を離れており、武雄指揮官**鍋島茂昌**が後始末をしたようなものである。恐らくは、**茂昌**は最高指揮官の戦場離脱も許せなかったのではないかと思われる。其の後の西南戦争においても、同様に**西郷**の適切な作戦判断は見られず、多数の薩摩兵を犠牲とし落命しており、**鍋島茂昌**の**西郷隆盛**評は一定の説得力を持つ。**大村益次郎**の銅像が靖國神社にあるのは当然として、**西郷隆盛**は国賊となったため靖國神社には不適當としても、彰義隊との戦闘が行われた上野に銅像があることも不思議である。

新政府には、鍋島藩の優秀な人材も活躍しているが、**鍋島茂昌**は佐賀の乱にも加担せず、また、西南戦争でも武雄から動かなかった。

農村改革・藩財政改革を通じて鍋島藩の中核にあり、また、世界情勢や最先端の科学技術を理解し、世界に対抗できる日本最強の軍事力を保有した**鍋島茂義・茂昌**親子が求めたものは、一体何だったのか興味津々である。先に述べたとおり、世界最先端の科学技術に触れたことにより、世界的な視野のもと、尊皇攘夷や佐幕開国等の国内紛争に振り回されることなく、冷静に時代の推移が見えていたのではないかと思われる。